残花

田宮千秋

兄
妹
父

舞台は仏壇の置かれた居間。蝉の声が響く。兄は畳の上に寝転がり、微動だにしない。時折寝返りをうち、ひたすら眠っている。荷物をもった妹が玄関から入ってきて、寝ている兄を見下ろす。

妹　ねえ、玄関掃除してって頼んだんだけど。
兄　うん。
妹　されてないじゃん。
兄　え？……したよ。別に汚れてなかったから、軽く。
妹　蝉、死んでんだけど。
兄　それは知らない。俺がはいた後だよ。

妹、呆れた大きなため息をつく。

妹　ほんっと最悪。お兄ちゃんさあ、そういう気遣いとかできないわけ？　暑いんだから外出て打ち水するとかさ、その時に気づかないわけ？　夏休みなんだから暇でしょ？
兄　お前も夏休みじゃん。
妹　私はあと三日で終わるし。お兄ちゃんあと一か月もあるじゃん。私バイトだし。お兄ちゃんニートだし。
兄　大学生だしニートじゃねえし。
妹　働いてよ。どうせやることないんでしょ？

兄、妹を無視してふて寝する。
妹、イライラしながら荷物を開き、買ってきた夕食の材料を冷蔵庫に入れていく。

妹　お兄ちゃんさあ。いい加減しっかりしてよ。いつまでも学生気分でいたら、将来苦労するよ。
兄　お前だって高校生だろ。

妹　私、心配していってるんだからね。お兄ちゃん就活情報も探さないしさ、いいところ行きたいとか、やりたいこと何かないの？　夢がない若者って駄目だね。

兄　何歳なんだよ。

妹　お兄ちゃんより下。ねえ、ほんとさ、しっかりしてくれない？　二年だよ。二年。お母さん死んでさ、もう二年たつの。いつまでそんな感じなの。穀潰し。

兄　ちゃんと勉強してるよ。

妹　勉強？　毎日遊んでるみたいに見えるけど。部屋に籠ってパソコンばっかしてさ。ぜんっぜん努力が見えない。そんなんだからいつまでも、私も母さんも心配してなきゃいけないんだから。お父さんだって迷惑してるよ。花屋、人手が足りないって。ちょうどいいじゃん。手伝いなよ。

兄　心配してくれとか、誰も頼んでねえよ。

兄、気だるげに起き上がり妹とにらみ合う。

兄　親が死んだら、親みたいにならないといけないわけ？

妹、言葉が詰まるが憤っている。

兄　別にさ、母さんにそうしろって言われたわけじゃないんだろ。母さん死ぬときお前になんかいった？　別に守んなくていいよ。俺はなんとでもするし、なんとでもなるから。ていうか、そんな苦労背負って楽しい？　母さんも喜ばねえよ。

妹、兄にクッションを投げつける。直撃。

兄　痛エ……お前！

兄、妹にクッションを思い切り投げつけようとするが、妹は扉から出ていく。閉まった扉にクッションが当たり、ずり落ちる。

扉越しに妹の声。

妹　バカ！　お兄ちゃんなんか……。

そのまま走り去る音がする。

兄　バーーカ。……

兄、ため息。
寝転がり、天井を見上げる。時計の針の音が聞こえる。柱時計の振り子の、鈍い金蔵音が鳴る。

兄　二年か。そんなにたったのか。

柱時計の音が鳴り終わると同時に、父がふすまを開き現れる（扉と反対側）。父は、菊の花を仏壇に供える。

父　いまの言い方はないぞ。
兄　だってあいつ俺の話聞かないよ。
父　難しい年ごろだからな。そんなときになあ。母さん、死んじゃったからなあ。
兄　あいつ、海に行けないんだって。行くと泣いちゃうから。
父　そんなこと言ってたのか？
兄　ＳＮＳ。
父　お前なあ。プライベートだぞ。
兄　だってそうでもしないとさ、何考えてんのかわかんないよ。あいつ、本当は大学進みたいんだって。……でも、俺もまだ勉強したい。
父　うん。なんとかなるさ。いざとなったら、おじさん、おばさんだっているしな。お前は後で稼いで返してくれればいいよ。
兄　……。

兄、複雑な表情のまま黙る。

父　お、何だ？
兄　俺は蝉みたいに死にたい。
父　おいおい。それって稼がないってことか？
兄　違うよ。妹に言われたんだ。夢がないって。
父　そうだなあ。お前のやりたいことは全然、聞かなかったなあ。
兄　いまもまだ、わからない。だから、生き方。
父　なんだ？
兄　夜にさ、蝉の抜け殻見つけたんだよ。大きな芙蓉の花弁についてた……夜なのにさ、真っ赤な花が咲いてたんだ。蝉って、八年くらい土に籠って、羽化したら最後の力で、開いて探すために鳴いて、死ぬんだよ。全力だよなあ。花も生きててさ、昼に咲いて夜しぼむと思ってたのに。ずっと俺より強い。……蝉みたいに、限界まで生きて、死にたい。

蝉の声が聞こえる。

父　妹が幸せになるまで、見届けてあげなくちゃあな。母さんの分まで。

兄　ごめん。

父　うん？

兄　俺のほうが……もっとしっかりできればよかった。

父　そうだなあ。しっかりしていたほうが嬉しかったけど。まあ、何とか生きていけるよ。お父さんも、そんな感じで、何とか生きてきたからさ。だからあとは、生きたもん勝ちだ。

いっそう強い蝉の声が聞こえる。窓のそばの木に蝉が張り付き鳴いている。それに気づき、兄も父も蝉を見る。

父　俺も、蝉みたいに生きたいなあ。わかるよ。

蝉の鳴き声の中、父は扉の方に向かう。扉が閉じられると、兄は完全に一人きりになった。蝉の声はふと止む。

妹、扉を開けて戻ってくる。

妹　……なんかご飯食べた？

兄　まだだけど。

妹　私は食べた。冷蔵庫におかずあるから、勝手に食べて。

妹、仏壇へ向かう。菊の花に気が付く。

妹　あ、菊の花……お父さんが言ってたやつか。

兄　なに？

妹　店の商品。ちょっと根腐れしてたらしいんだけど、最後まで残ってた、強い花だって。

終